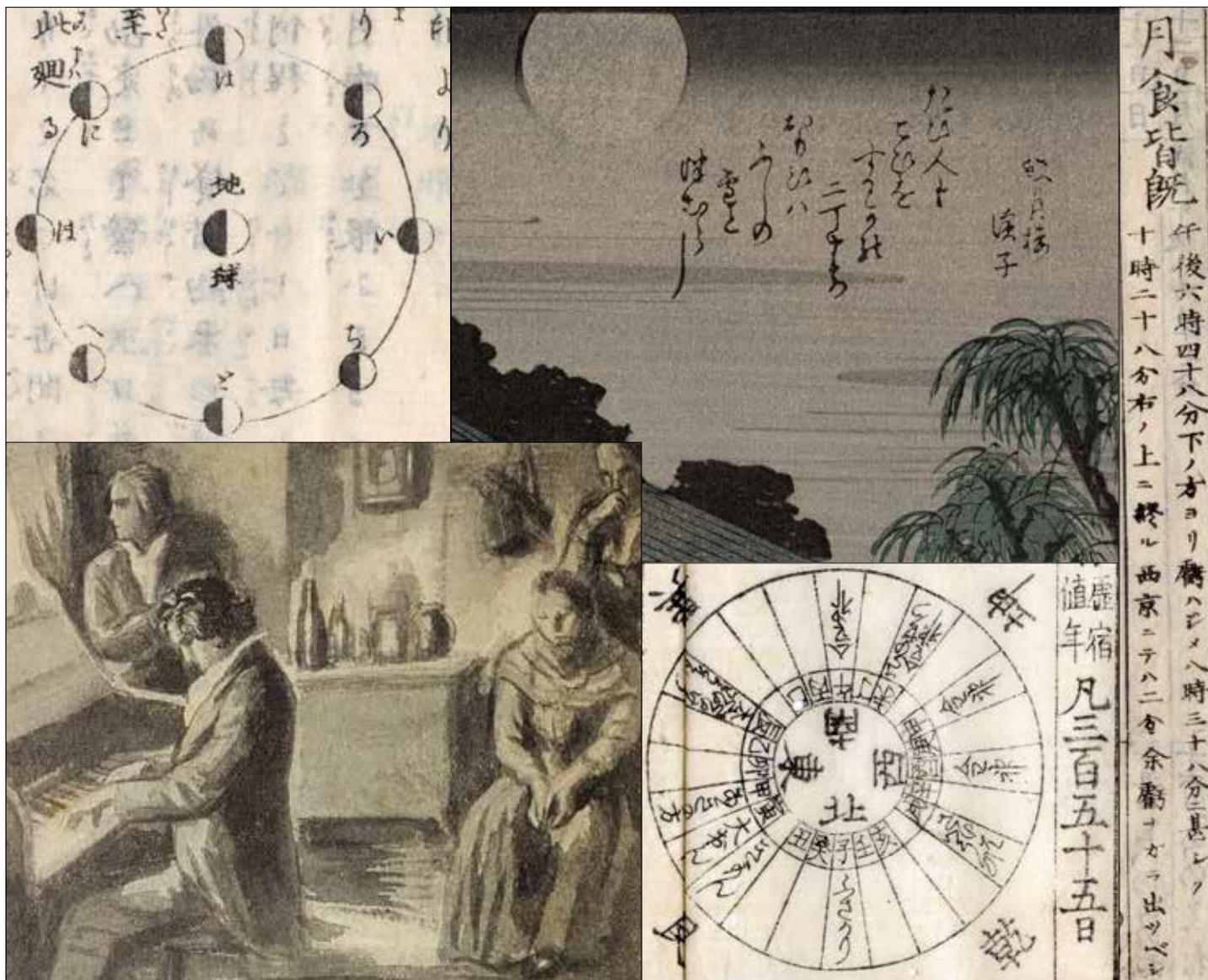


一月をながめた人びと



(最右側から時計回りに 1873年(明治6)「明治六年太陽暦」 坪田仁兵衛家文書(当館寄託) C0005-01821
1821年(文政4)～1868年(明治1)「(曆 文政4-13(欠8) 天保3-16(欠11) 弘化3-5 嘉永2-8 安政3・7 文久3-4 元治2 慶応2-4年)」
松田三左衛門家文書(当館蔵) A0169-00827
1939年(昭和14)10月「小学国語読本 卷十一」 坪田仁兵衛家文書(当館寄託) C0005-01470
1873年(明治6)1月1日「改暦弁」 吉川充雄家文書(当館蔵) C0037-00787
年月日未詳「(東海道五十三次など)」 勝見宗左衛門家文書(当館蔵) B0037-00661

1969(昭和44)年、アポロ11号は史上初めて人類を月に着陸させることに成功しました。人類で初めて月面に降り立ったアームストロングは「人間にとって小さな一歩だが、人類にとって大いなる飛躍だ」と世界に呼びかけました。

それから50年後の2019年6月15日(土)～21日(金)、第32回宇宙技術および科学の国際シンポジウム(ISTS)が福井県で開催されます。ISTSは世界最大規模の宇宙国際会議で、福井県での開催は初めてです。

この展示では人類の月面着陸50周年とISTS福井大会の開催を記念し、月にまつわる資料を紹介します。

2019年4月26日(金)～6月26日(水)

福井県文書館閲覧室

後援：宇宙航空研究開発機構(JAXA)

主な展示資料

(1) 陰暦これくしょん

江戸時代の暦は太陰太陽暦（太陰暦、陰暦）と呼ばれ、1ヶ月を月（太陰）が満ち欠ける周期に合わせて作成されていました。月が地球をまわる周期は約29.5日なので、30日と29日の長さの月を作って調節し、30日の月を「大の月」、29日の月を「小の月」と呼んでいました。

一方で、地球が太陽のまわりをまわる周期は約365.25日で、季節はそれによって移り変わります。大小の月の繰り返しでは、暦と季節が合わなくなってきました。そこで、2～3年に1度は閏月を作って13ヶ月ある年を作り、季節と暦を調節しました。江戸時代に入り、天文学の知識が高まると、暦と日食や月食などの天体の動きが合わないことが問題となり、江戸幕府が主導して暦を改めようとする動きが起きました。

1685年（貞享2）、渋川春海によって初めて日本人による暦法が作られ、暦が改められました。これを「貞享の改暦」といいます。

その後、「宝暦の改暦」（1755年（宝暦5））、「寛政の改暦」（1798年（寛政10））、「天保の改暦」（1844年（弘化1））と4回の改暦が行われました。

紹介している資料は「新法暦書（天保暦）」です。これは高橋景保と渋川景佑によって作成された太陰太陽暦で、最新の西洋天文学の成果を取り入れています。前文には改暦の理由や暦の名前の由来などが記されています。



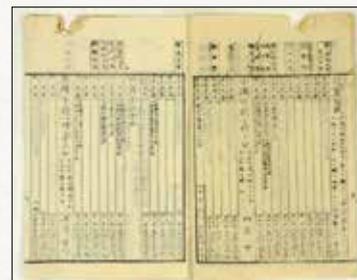
1821年（文政4）～1868年（明治1）
「（暦 文政4-13（欠8） 天保3-16（欠11） 弘化3-5 嘉永2-8 安政3・7 文久3-4 元治2 慶応2-4年）」
松田三左衛門家文書（当館蔵）
A0169-00827

(2) 太陽暦の導入

明治政府は西洋の制度を導入して近代化を進めました。その中で、暦も欧米との統一をはかり、1872年（明治5）11月、太陽暦（グレゴリオ暦）への改暦を発表しました。

これにより、73年から太陰太陽暦にかわり現在使われている太陽暦が採用されたのです。しかし、72年12月3日が新しい暦では73年1月1日となったため、国内は混乱しました。

資料は改暦最初の太陽暦です。太陽暦での月日と曜日だけでなく、月齢や節気が記載されています。また、下部には太陰太陽暦での月日と干支が記載されています。



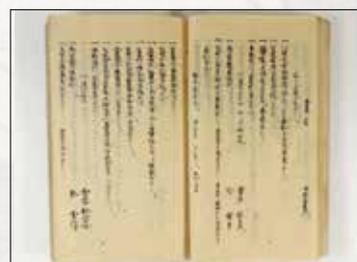
1873年（明治6）「明治六年太陽暦」
坪田仁兵衛家文書（当館寄託）
C0005-01821

(3) 春嶽も見た月食

「御側向頭取御用日記」は、松平慶永（春嶽）の側近である側向頭取が記した日記です。慶永の日常が細かく記録されている貴重な資料です。

1866年（慶応2）8月16日、日中は雨でしたが、夜になると晴れて皆既月食を日本でも見ることができました。この資料では「月蝕 皆既」と記録されています。京都では22時29分～0時7分まで月食が見えたそうです。

この日慶永は京都にいて、少なくとも夜の1時過ぎまで起きていたことから、皆既月食を見たかもしれません。

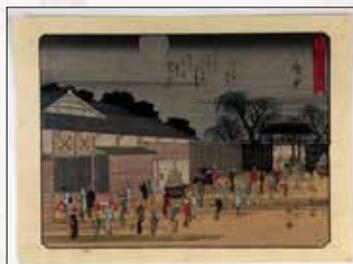


1866年（慶応2）7月～12月
「御側向頭取御用日記（13）」
松平文庫（福井県立図書館保管）
A0143-00523

(4) 東海道を照らす月

「東海道五十三次」は歌川広重の代表作ですが、広重は様々な「東海道五十三次」のシリーズを作りました。

その中でもこれは「狂歌入東海道」と呼ばれるシリーズの作品です。絵の中に狂歌が書かれているのが特徴です。



年月日未詳 「（東海道五十三次など）」
勝見宗左衛門家文書（当館蔵） B0037-00661

(5) 天気が悪いのはツキがないからだ

雑書とは、近代以前における各種の暦や占いにに関する書物のことを言います。
資料は1842年(天保13)以来何度も重版された「永代大雑書万暦大成」を、明治時代に出版したものです。

紹介しているのは月の雑占(たくさんの雑多な占い)の部分です。月に関する様々な占いを集めています。月の形や色、月にかかる雲の様子などから、天気がこれからどのように変化するかがまとめられています。月に関する占い以外にも、月の動きや月食などに関する記述も見受けられます。



1901年(明治34)
「明治補刻永代大雑書万暦大成」
坪田仁兵衛家文書(当館寄託)
C0005-01345

(6) 「月光」誕生偽物語

資料は昭和期の小学校6年生の国語の教科書です。ベートーヴェンが作曲したピアノソナタ第14番(通称「月光」)を題材とした単元が収録されています。

「ベートーヴェンが月明かりの中で散歩をしていると、一軒の家からピアノの音が聞こえてきた。近づいて見ると、家の中でピアノを弾いていたのは盲目の少女で、それに驚いたベートーヴェンは、家にお邪魔して、即興演奏をし、その演奏をもとに帰宅してから完成させたのが不朽の名作「月光」である。」以上が、簡単なあらすじです。

しかし、この話は全くのデタラメです。ヨーロッパで作られたフィクションのようですが、日本ではこのように教科書に掲載されていたこともあり、長年信じられていました。

そもそも、ベートーヴェンは自分の作った曲に自分でタイトルをつけることを嫌っていたことで知られ、「月光」という呼び名はベートーヴェンがつけたものではありません。



1939年(昭和14)10月
「小学国語読本 卷十一」
坪田仁兵衛家文書(当館寄託)
C0005-01470

(7) 諭吉の熱弁

1872年(明治5)11月の太陽暦への改暦に対し、福沢諭吉が73年(明治6)1月に出版したのが「改暦弁」です。

新旧暦の比較を中心に、曜日や月の英語名、時計の見方までも記述しています。

福沢は「太陽暦の採用には賛成だが、政府は簡単な改暦の布告と詔書を一方的に下すのみで国民に詳しく説明しようとしぬ。そこで、自分が改暦について説明しようと考えた」と後に回顧しています。

ちなみに、改暦の布告・詔書が下された頃、福沢は風邪で寝ていましたが、病床で執筆し、約6時間で原稿を完成させたといわれます。



1873年(明治6)1月1日「改暦弁」
吉川充雄家文書(当館蔵)
C0037-00787

(8) 芭蕉も見た敦賀の月

資料は敦賀の名所などを題材とした写真絵葉書です。敦賀と月といえば、松尾芭蕉です。

1689年(元禄2)8月14日～16日、『おくのほそ道』の旅程で芭蕉は敦賀に滞在し、気比神宮や金ヶ崎、金前寺や色ヶ浜、本隆寺などを訪れています。

14日の夜、芭蕉は翌日に月を見に行こうと考えていましたが、宿の主人から北陸の天気は不安定なことを聞き、その日の夜のうちに月を見に行きました。

翌15日、主人の言う通り、雨が降りました。そこで芭蕉が詠んだのが、「名月や 北国日和 定めなき」です。



年月日未詳
「(絵葉書 敦賀港、弁天岩、松原公園、
神宮寺鐘、西福寺)」
桜井市兵衛家文書(当館蔵)
N0055-00763

その他の展示資料

・大正期の暦

1922年(大正11)～1925年(大正14)「大正十二、十三、十五年略本暦」松田三左衛門家文書(当館蔵) A0169-02262

・りかのおべんきょう

1913年(大正2)1月「高等小学理科書 第二学年児童用」坪田仁兵衛家文書(当館寄託) C0005-01904

・仲麻呂、歌を詠む

1691年(元禄4)「古今和歌集(巻1-10)」桜井市兵衛家文書(当館蔵) N0055-00809

資料	年代／「資料名」 資料群名（所蔵者）／資料番号	複製本番号 （ページ始～ページ終）
陰暦これくしょん	1821年（文政4）～1868年（明治1） 「（暦 文政4-13（欠8） 天保3-16（欠11） 弘化3-5 嘉永2-8 安政3・7 文久3-4 元治2 慶応2-4年）」 松田三左衛門家文書（当館蔵） A0169-00827	A3429（1～92） A3430（1～94）
太陽暦の導入	1873年（明治6） 「明治六年太陽暦」 坪田仁兵衛家文書（当館寄託） C0005-01821	C2594（56～70）
大正期の暦	1922年（大正11）～1925年（大正14） 「大正十二、十三、十五年略本暦」 松田三左衛門家文書（当館蔵） A0169-02262	A3679（74～138）
春嶽も見た月食	1866年（慶応2）7月～12月 「御側向頭取御用日記（13）」 松平文庫（福井県立図書館保管） A0143-00523	A03871（1～87）
東海道を照らす月	年月日未詳 「（東海道五十三次など）」 勝見宗左衛門家文書（当館蔵） B0037-00661	B0338（17～85）
天気が悪いのは ツキがないからだ	1901年（明治34） 「明治補刻永代大雑書万暦大成」 坪田仁兵衛家文書（当館寄託） C0005-01345	C2129（1～110） C2130（1～100） C2131（1～132）
「月光」誕生偽物語	1939年（昭和14）10月 「小学国語読本 卷十一」 坪田仁兵衛家文書（当館寄託） C0005-01470	C2190（1～101）
りかのおべんきょう	1913年（大正2）1月 「高等小学理科書 第二学年児童用」 坪田仁兵衛家文書（当館寄託） C0005-01904	C2613（29～59）
諭吉の熱弁	1873年（明治6）1月1日 「改暦弁」 吉川充雄家文書（当館蔵） C0037-00787	C2379（1～13）
芭蕉も見た敦賀の月	年月日未詳 「（絵葉書 敦賀港、弁天岩、松原公園、神宮寺鐘、西福寺）」 桜井市兵衛家文書（当館蔵） N0055-00763	N1031（97～101）
仲麻呂、歌を詠む	1691年（元禄4） 「古今和歌集（巻1-10）」 桜井市兵衛家文書（当館蔵） N0055-00809	N1048（1～90）